鹿島川流域の縄文時代の遺跡

－千葉市野呂町八反目台貝塚－

田　中　英　世

Ⅰ　はじめに

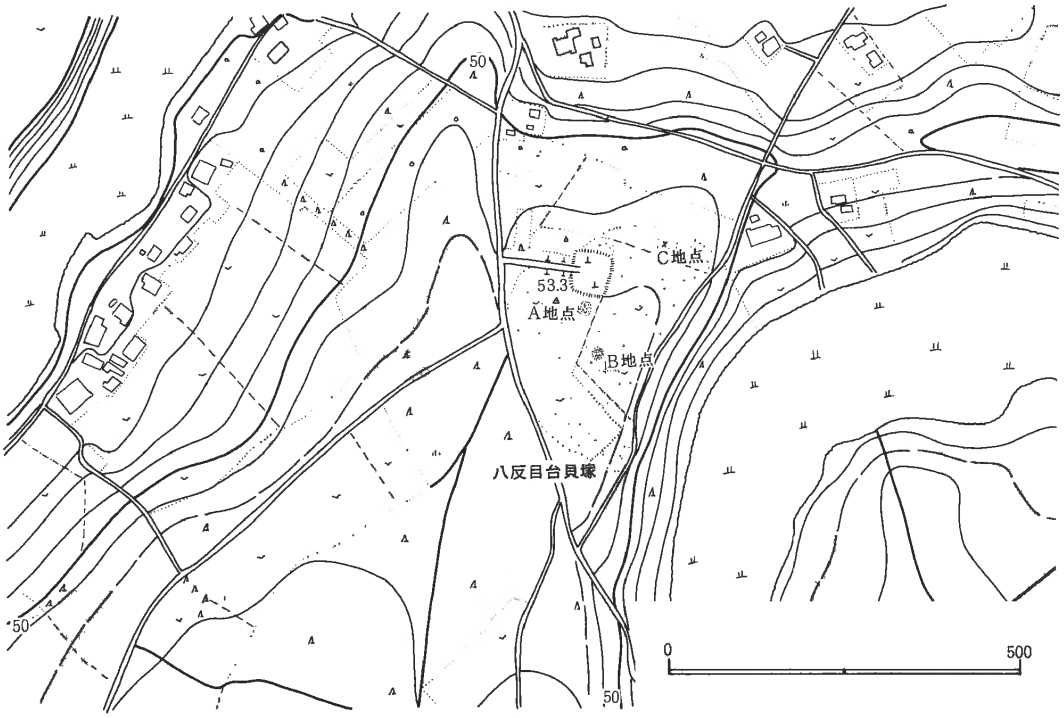
下総台地は上総丘陵から東京湾及び利根川へ、南東から北又は北西方向へゆるく傾斜する広大な台地である。鹿島川はこの下総台地の中央部を南北に縦断して印旛沼に注ぎ、都川は北上しながら西側へ大きく屈曲して東京湾に注ぎ込む。鹿島川と都川が最も近接する地点が千葉市野呂町であり、野呂山田貝塚・芳賀輪遺跡等の多くの遺跡が存在する。

八反目台貝塚は千葉市野呂町八反目台に所在し、昭和48年度の千葉市教育委員会による埋蔵文化財の分布調査により新たに発見されたもので、『千葉県石器時代地名表』にも『千葉県記念物所在地図』にも記載はない。筆者は芳賀輪遺跡の発掘調査に参加したおり、耕作者の高沼和枝さんより本貝塚出土の注口土器及び木菟土偶の提示を受け、以後数度に亘る踏査の結果、縄文時代後期の堀之内Ⅰ式から晩期前半の姥山Ⅲ式までの土器及び磨製石斧・石棒片・凹石等を採集した。これと前後して飯塚博和氏（現野田市郷土資料館学芸員）による踏査も行なわれ、前記の土器の他に早期の撚糸文系土器と晩期中葉の安行Ⅲｃ式土器及び撚糸文を有する粗製土器が採集され、今回の発表にあたり資料の委譲を受けた。なお昭和48年度の分布調査の際にもアメリカ石鏃・山形土偶が採集されており、当時は百万本（おはやし）貝塚と呼称されていた。

Ⅱ　遺跡の概要と周辺の遺跡

遺跡は鹿島川と都川が最も近接し分水界をなす台地の東側に立地し、遺跡の前面で平川町付近に水源を発する鹿島川の支流が東に蛇行し、再び北上する。遺跡はこの鹿島川の支流と西側の支谷に挟まれて、東側にくびれる舌状台地のくびれ部に位置し、標高53ｍ（遺跡の中央部に53.3ｍの三角点が設置されている）、水田との比高差は約10ｍを計る。

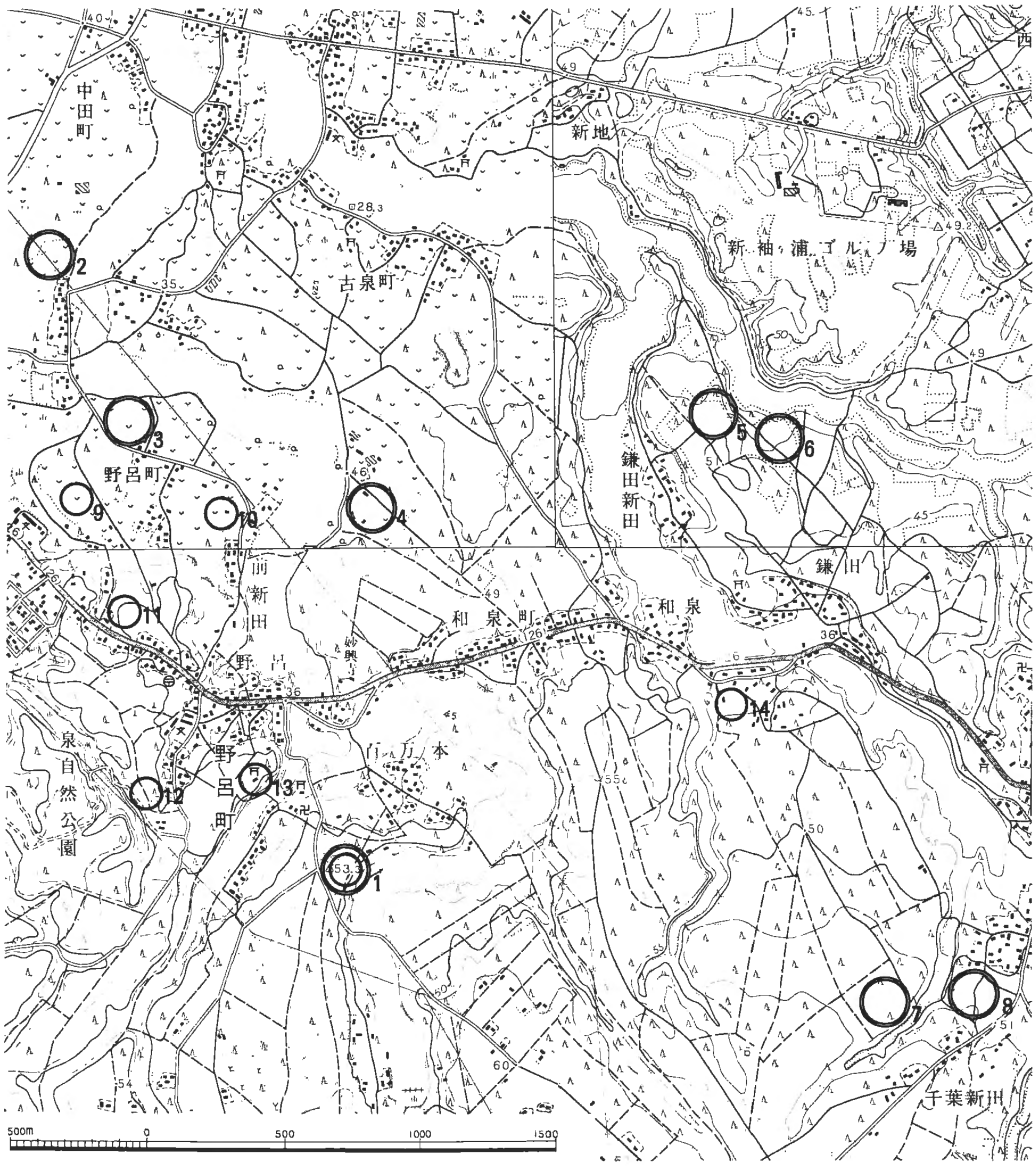
遺跡は大部分が山林に覆われており、規模・形態等は判然としないが、西側の畑に１ケ所（Ａ地点・三角点設置地点）、山林の中に１ケ所（Ｂ地点）の計２ケ所の地点貝層が露出している。加曽利貝塚博物館のボーリング調査によれば、東西150ｍ×南北200ｍの範囲に５～６ケ所の地点貝層が東側に開口部を有しながら馬蹄形に分布しており（文献１）、開口部の東側は急斜面を形成する（第１図）。



第１図　八反目台貝塚地形図（1：5,000）

Ａ地点は最も遺物量が多く、ハマグリを主体としてオキシジミ・シオフキ・キサゴ・アサリ等により構成される径５ｍの住居址内投棄の貝層がみられる。加曽利Ｂ式～安行Ｉ式土器を主体として堀之内Ｉ式～安行Ⅲｃ式土器が採集されている他、注口土器・山形土偶・木菟土偶・磨製石斧が採集されている。貝層は加曽利ＢⅡ式～安行Ｉ式期のものである。Ｂ地点はハマグリを主体としてシオフキ・カガミガイ等で構成される貝層がみられるが遺物は採集されなかった。Ｃ地点は貝層を確認できなかったが、安行Ｉ式～安行Ⅱ式を主体に堀之内Ｉ式～安行Ⅲｃ式土器が採集されている。当地点は晩期中葉の撚糸文を有する粗製土器とチャートの剥片がかなり散布している。

周辺の遺跡としては、中期後半から後期中葉の芳賀輪遺跡が北方1.5㎞に、僧御堂遺跡が東方２㎞に、後期の野呂山田貝塚が北方２㎞に、宮ノ台遺跡が西方0.6㎞の都川の支谷最奥部に各々存在する。芳賀輪遺跡は昭和50年から発掘調査が行なわれ、加曽利ＥⅡ式期～ＥⅢ式期の住居址が21軒検出され、土壙も早期の陥穴を含めて60基が検出されている（文献２）。僧御堂遺跡は昭和50年に発掘調査が行なわれ、加曽利Ｅ終末期の住居址11軒、堀之内Ｉ式期の住居址１軒の他に54基の土壙が検出されている（文献３）。 野呂山田貝塚は後期の地点貝層が５～



第２図　主要遺跡分布図

1. 八反目台貝塚（堀Ⅰ～安行Ⅲｃ）
2. 宮田遺跡（加ＥⅡ・Ⅲ・加ＢⅠ）
3. 野呂山田貝塚（加ＥⅡ～安行Ⅲｂ）
4. 芳賀輪遺跡（井草～安行Ⅰ）
5. 内駒込遺跡（加ＥⅡ～Ⅳ・加ＢⅡ）
6. 外堀込遺跡（加ＥⅣ）
7. 皿ケ谷遺跡（夏島）
8. 僧御堂遺跡（加ＥⅡ～加ＢⅠ）
9. 西奥前遺跡（加Ｂ～安Ⅱ）
10. 太田遺跡（加ＥⅠ・加ＢⅡ）
11. 奥前遺跡（加ＥⅡ・加Ｂ）
12. 宮ノ台遺跡（加ＥⅡ～安Ⅰ）
13. 向堀越遺跡（加ＥⅡ・加Ｂ）
14. ムカエ遺跡（加ＥⅠ・Ⅱ）

6ケ所存在し、昭和31年に川戸彰氏により加曽利B式期の貝層が発掘調査され、石斧・石鏃・土偶・貝輪等が出土している（文献4）。宮ノ台遺跡は昭和58年に発掘調査が行なわれ、堀之内Ⅰ式期の住居址2軒・加曽利B式期の住居址3軒が検出された他に、猪・鹿等の獣骨を伴なう加曽利B式期の投棄貝層が検出されている。この他に早期前半の皿ケ谷遺跡・中期後半の宮田遺跡・外堀込遺跡・内駒込遺跡等が存在する（第2図）。

Ⅲ　遺物について

今回紹介する遺物は、筆者の踏査資料に高沼隆・和枝夫妻採集資料及び飯塚氏の踏査資料を加えたものである。

A　土　器

1　縄文時代早期前半の土器（第3図1・2）

撚糸文系土器が僅か2片であるが採集されている。**1**は口縁部が肥厚し、口縁下1㎝の無文帯を設けた後にLの撚糸文を施している。**2**は器面が荒れており判然としないがL・Rの縄文を施文している。ともに夏島式土器である。

2　縄文時代中期後半の土器（第3図3・4）

3は貼り付け隆帯を有するキャリパー形土器の口縁部で加曽利EⅠ式土器。**4**は大木9式土器の影響を受けた加曽利EⅢ式土器で、3本1組の沈線により渦巻文が構成される。

3　縄文時代後期前葉の土器（第3図5）

磨消縄文を主体とした称名寺式土器で、僅か1片ながら採集されている。

4　縄文時代後期前半の土器（第3図6～14）

Ⅰ類（第3図6・7）　波状口縁部の無文帯上に縦長の隆帯を貼り付けた後、太い沈線を施す深鉢形土器。

Ⅱ類（第3図8～12）　縄文の地文上に直線あるいは曲線の沈線文を有するもので更に幾つかに分類される。**9**は地文の縄文が消されており、中央部に刻み目を施した隆帯がみられ、堀之内Ⅰ式でも比較的新しいものである。

Ⅲ類（第3図13・14）　櫛状工具により曲線文を施している深鉢形土器。

以上堀之内Ⅰ式土器に比定されるが、この他に注口土器が採集されている。

5　縄文時代後期中葉の土器（第3図15～第4図31）

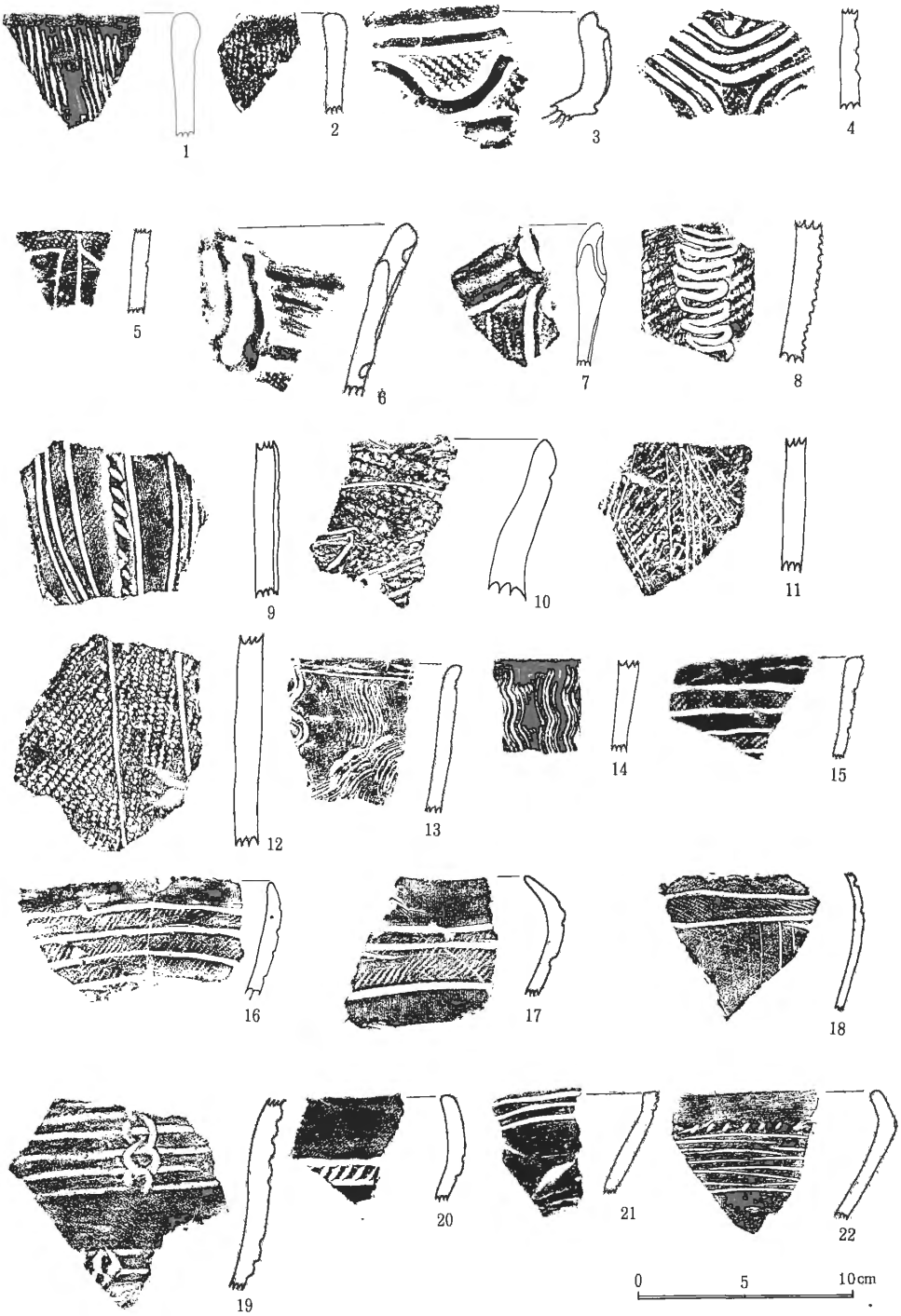
Ⅰ類（第3図15～18）　口縁部文様帯が平行沈線間の磨消縄文で構成される浅鉢形土器。

Ⅱ類（第3図19）　沈線によるS字状の区画文を有する浅鉢形土器。

Ⅲ類（第3図20）　刻文帯を有する無文平縁口縁の浅鉢形土器。

Ⅳ類（第3図21）　口縁部に沈線文を有する浅鉢形土器。

Ⅴ類（第3図22）　口縁部がくの字状に内屈し、頸部に刻み目を施し以下沈線文を施文した浅鉢形土器。



第３図　八反目台貝塚表採遺物(1)

Ⅵ類（第４図23）　無文の浅鉢形土器で口縁に２本の凸帯を有する。

Ⅶ類（第４図24）　口縁が外反し胴部上半でくびれる小形の深鉢形土器で、縄文を施している波状口縁の口唇部に刻目を有する。

Ⅷ類（第４図25・26）　頸部に廻らした２本の平行沈線間に刻み目を充塡し、体部には太めの斜行沈線文を施す深鉢形土器。

Ⅸ類（第４図27）　口縁部が外側に大きく開く鉢形土器の胴部で、頸部を磨いて無文帯とし稜部には刻み目を充塡している。

Ⅹ類（第４図28）　格子目文の粗製土器で内側に浅い沈線を有する。

Ⅺ類（第４図30・31）　口縁部に指頭圧痕文を有する紐線を廻らせた深鉢形土器。粗い縄文の地文上に太い斜条線を施している。

以上加曽利Ｂ式土器に比定されるが、Ⅰ・Ⅱ類は加曽利ＢⅠ式、Ⅲ～Ⅷ類は加曽利ＢⅡ式、Ⅸ類は加曽利ＢⅢ式に比定され、Ⅹ・Ⅺ類は加曽利ＢⅡ式以降の土器に伴なう粗製土器である。この他に本貝塚出土の唯一の完形品である注口土器があるが後に詳述する（第７図１）。

6　縄文時代後期後半の土器（第４図32～43）

Ⅰ類（第４図32）　帯縄文を有する波状口縁の深鉢形土器。口縁に並行して３本の隆起帯状縄文とその間を連結する瘤状突起によって特徴づけられ、胴部上半は細かい条線文を施す。

Ⅱ類（第４図33）　平縁口縁の深鉢形土器。器形は胴部上半でくびれる朝顔形を呈する。口縁直下の平行沈線間に列点を充塡し、その上に瘤状小突起を配する。胴部の文様は弧線文・連弧状磨消縄文によって構成される。

Ⅲ類（第４図34・35）　帯縄文を有する平縁の深鉢形土器。２段の狭い帯状縄文をもち、縦長の瘤状小突起がそれを跨ぐように配されている。胴部文様はⅡ類同様連弧状磨消縄文が主体を占める。

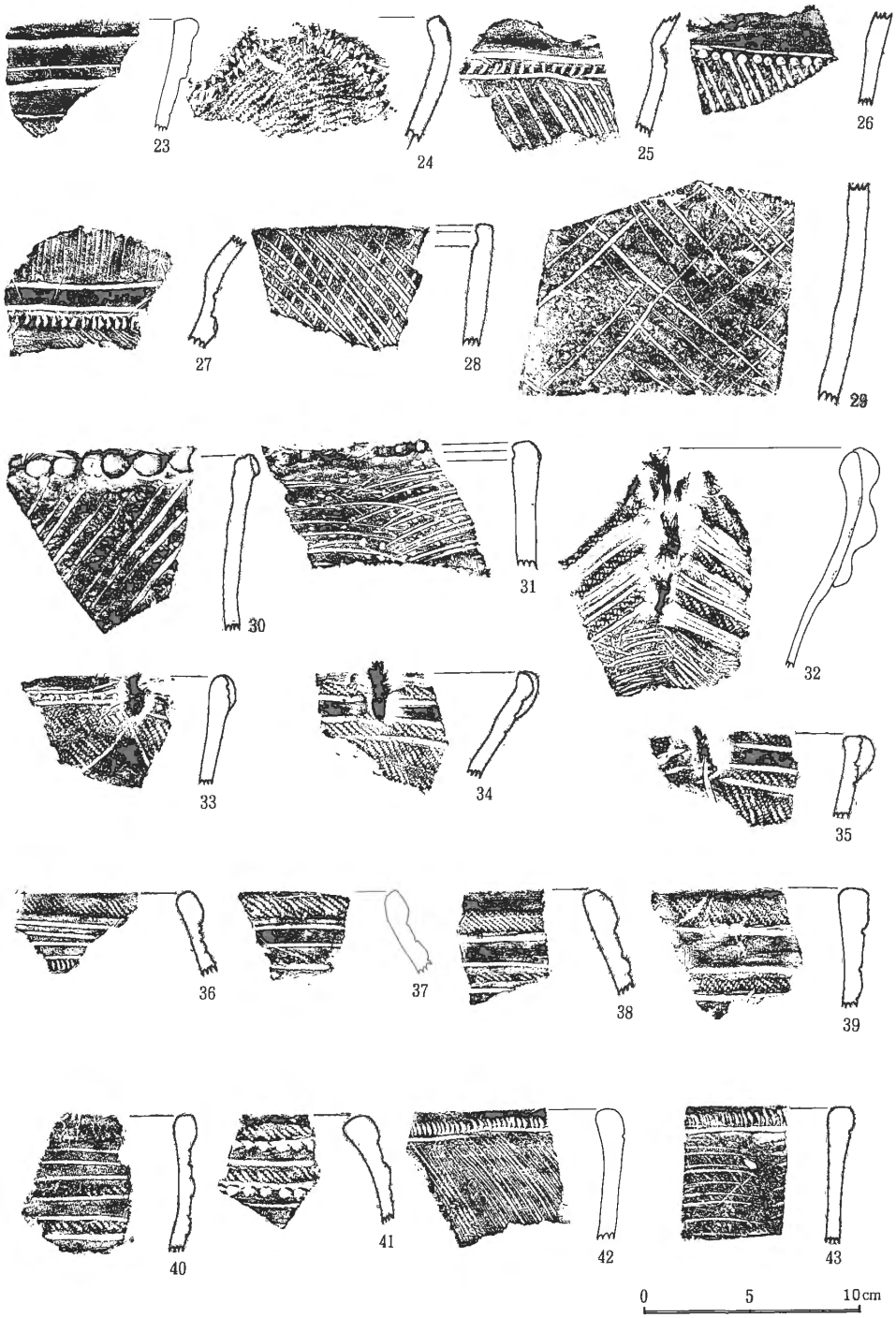
Ⅳ類（第４図36～41）　内傾する平縁口縁の深鉢形土器で、口縁部文様帯は数段の帯状縄文で構成され、それに接して列点を有するものや、図示していないが紐かけ穴とみられる穿孔が行なわれているものもみられる。**41**は台付鉢形土器の台部であろうか。

Ⅴ類（第４図42・43）　口縁下に一条の沈線を廻らしその間に爪形文を施す。以下浅い斜位ないし横位の条線を施している粗製深鉢形土器。

以上Ⅱ類は曽谷式に、Ⅰ類及びⅢ類～Ⅴ類は安行１式土器に比定される。

7　縄文後期末葉から晩期前半の土器（第５図44～第６図79）

Ⅰ類（第５図44～47）　発達した波状口縁と隆起帯状縄文に特徴づけられる深鉢形土器。**44**の横刻みの瘤状突起と刻目を施した三角形内帯文を有する安行Ⅱ式に含まれる土器と、**45・46**の縦方向の押圧の瘤状突起と縄文を施した三角形内帯文を有する安行Ⅲａ式の範疇に含まれる土器に２分される可能性がある。



第４図　八反目台貝塚表採遺物(2)

Ⅱ類（第５図48）　平縁口縁が内傾し、隆起帯状縄文上に横刻みの瘤状突起を、刻目を有する三角形内帯文の交点にはいわゆる豚鼻状の瘤状突起を配する。注口土器の可能性も考えられる。

Ⅲ類（第５図49・50）　横刻みの瘤状突起を配した把手を有する平縁口縁が内傾する深鉢形土器。隆起帯状縄文とそれを縦に結ぶ縄文帯による区画文に特徴づけられ、縄文帯上にいわゆる豚鼻状小突起を有する。

Ⅳ類（第５図51）　Ⅲ類同様隆起帯状縄文により２段の枠状文が構成されるが、口縁部にボタン状の小突起がみられるのみとなる。

Ⅴ類（第５図52）　Ⅳ類の縄文帯が無文化し、沈線のみの枠状文下に幅の狭い斜条線を施す。

Ⅵ類（第５図53）　波状口縁を呈し、稲妻状あるいは菱形状及び円形の文様が沈線により施文される深鉢形土器。

Ⅶ類（第５図54～56）　平行沈線ないし沈線で区画された円形区画文内に細密沈線を施す深鉢形土器。

Ⅷ類（第５図57）　刻目を有する狭い隆帯により２段の枠状文が構成される浅鉢形土器。

Ⅸ類（第５図58～60）　弧状入組文・三又状入組文を有する鉢形土器。器形は直線的な立ち上がりを呈するものや口縁が内傾して胴部の中央が膨れるものなどがみられる。

Ⅹ類（第５図61）　注口土器。注口下に横長の縦刻みの瘤状突起と豚鼻状小突起を配し、刻目及び磨消縄文で文様が構成される。

Ⅺ類（第５図62～第６図76）　紐線文の粗製深鉢形土器で３種に分けられる。

１種（第５図62～66）　口縁部と胴部上半に連続爪形文を有する２本の紐線を配し、胴部上半では横位、下半では右下りの条線が施文されている。

２種（第５図67～第６図73）　連続爪形文を有する２本の紐線間に縦方向の平行沈線・弧状沈線を施す土器で、沈線間を磨消すのが一般的である。地文は１種同様条線文であるが、粗い縄文を伴なう例や爪形文のかわりに指頭圧痕文を施している例などがみられる。

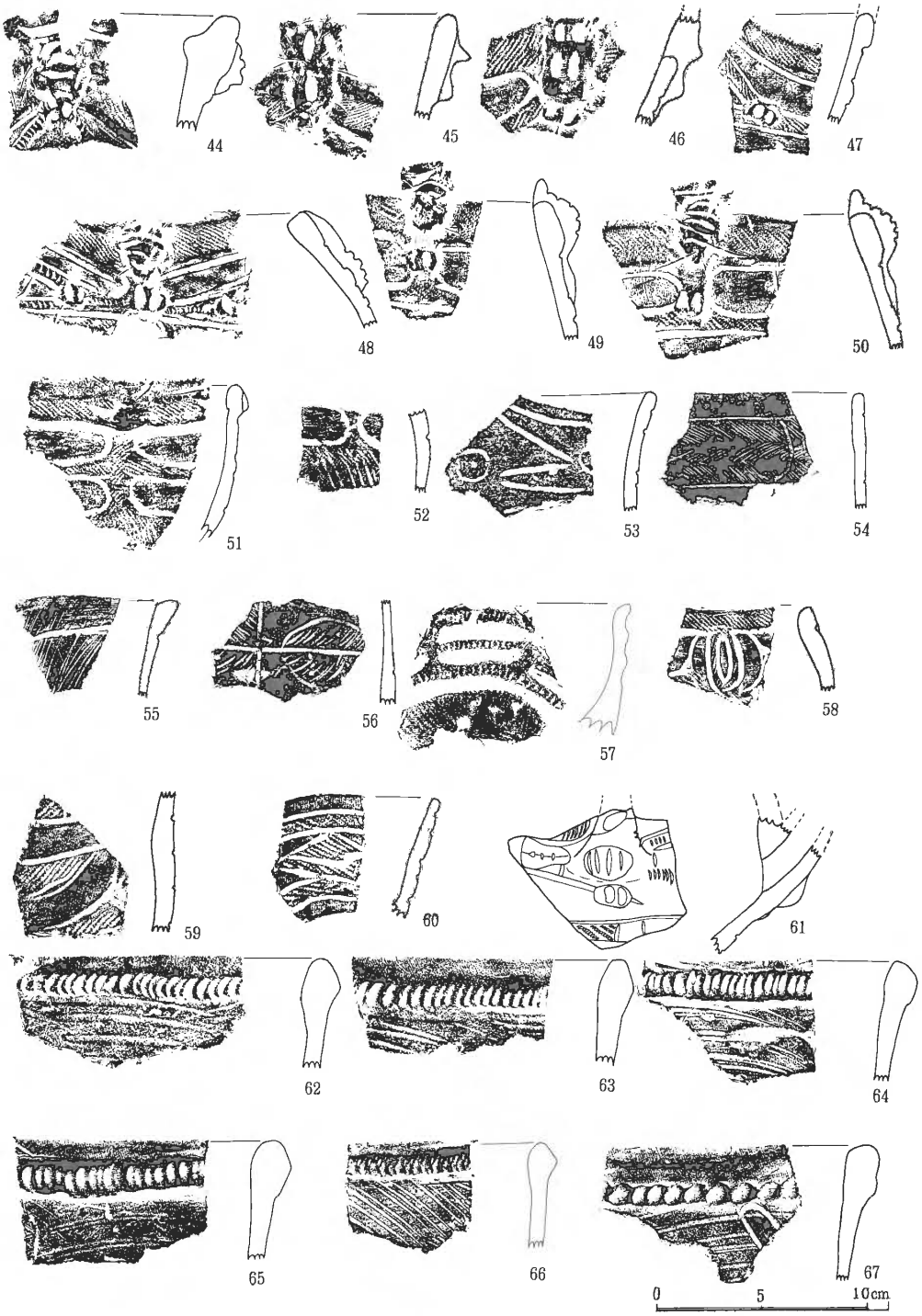
３種（第６図74～76）　紐線がみられず、横走する条線文のみの土器。

Ⅻ類（第７図77）　折り返し口縁を有する無文の粗製土器。口縁は成形時の指頭による圧痕がみられ、内面は砂粒による整形痕が著しく、補修孔がみられる。

XⅢ類（第６図78）　口縁下に１条の沈線を施し、その間に列点文を加える。口縁が内傾し胴部上半が張る深鉢形土器。

XⅣ類（第６図79）　刻目を充填した平行沈線間にやはり刻目を充填した入組文を施す。

以上14類に分類したが、Ⅰ類の一部及びⅡ類・Ⅲ類・Ⅷ類が安行Ⅱ式に、Ⅰ類の一部及びⅨ類が安行Ⅲａ式に、Ⅳ類が姥山Ⅱ式に、　Ⅴ～Ⅶ類が姥山Ⅲ式に各々比定される。Ⅺ類の粗製土器は従来安行Ⅱ式から安行Ⅲａ式に伴なう土器とされてきたが、近年安行Ⅰ式まで遡る可能性が指摘されている（文献５）。XⅣ類は千葉市矢作貝塚より同形の口縁部が出土しており（文献６）、東北地方南部の後期後半の瘤付土器の最終末にあたる新地４式土器であろう。



第５図　八反目台貝塚採集遺物

8　縄文晩期中葉から後半の土器（第６図80～90）

Ⅰ類（第６図80～82）　沈線間に列点を充塡する文様で構成される安行Ⅲｃ式土器。

Ⅱ類（第６図83）いわゆる「の」の字状文を特徴とする前浦式土器。

Ⅲ類（第６図84～90）　撚糸文を施した粗製土器で口縁形態にいくつかのバラエティーがみられる。

１種（第６図84～86）　口縁下に１条ないし２条の沈線を施し、その間を撚糸文で充たす。比較的厚く撚糸・沈線ともに太いもの、２条の沈線間に細かい撚糸文を施すもの、細かい列点を有するもの等がみられる。

２種（第６図87・88）　折り返し口縁を有するもので、器肉は薄く折り返し部に撚糸文が施され、頸部は無文帯となる。器形は口縁部からゆるやかに底部に至るものと、頸部が若干えぐれるものの２種がみられる。87は口唇部に列点を施している。

Ⅲ類土器はこれまで前浦式土器及び千網式土器に伴なう粗製土器とされてきたものであり、胴部破片を含めるとＣ地点よりかなり採集されている。２種の土器は茨城県殿内遺跡や千葉県山武姥山貝塚でも比較的多く出土しており、口唇部に撚糸の圧痕を有するものや押圧により波状口縁を呈する例も多くみられる。これに対して１種の土器は神奈川県杉田遺跡や千葉県荒海貝塚・天神前遺跡において僅かながら出土しているのみで、比較的良好な晩期後半の遺跡でも１種の土器の出土例は少ない。荒海貝塚Ｃ地点では84のように太い沈線を廻らす撚糸文土器が前浦式土器に伴なう可能性を示唆しているものの現在でも類例は乏しく今後の検討を要する（文献７）。

9　注口土器（第７図１）

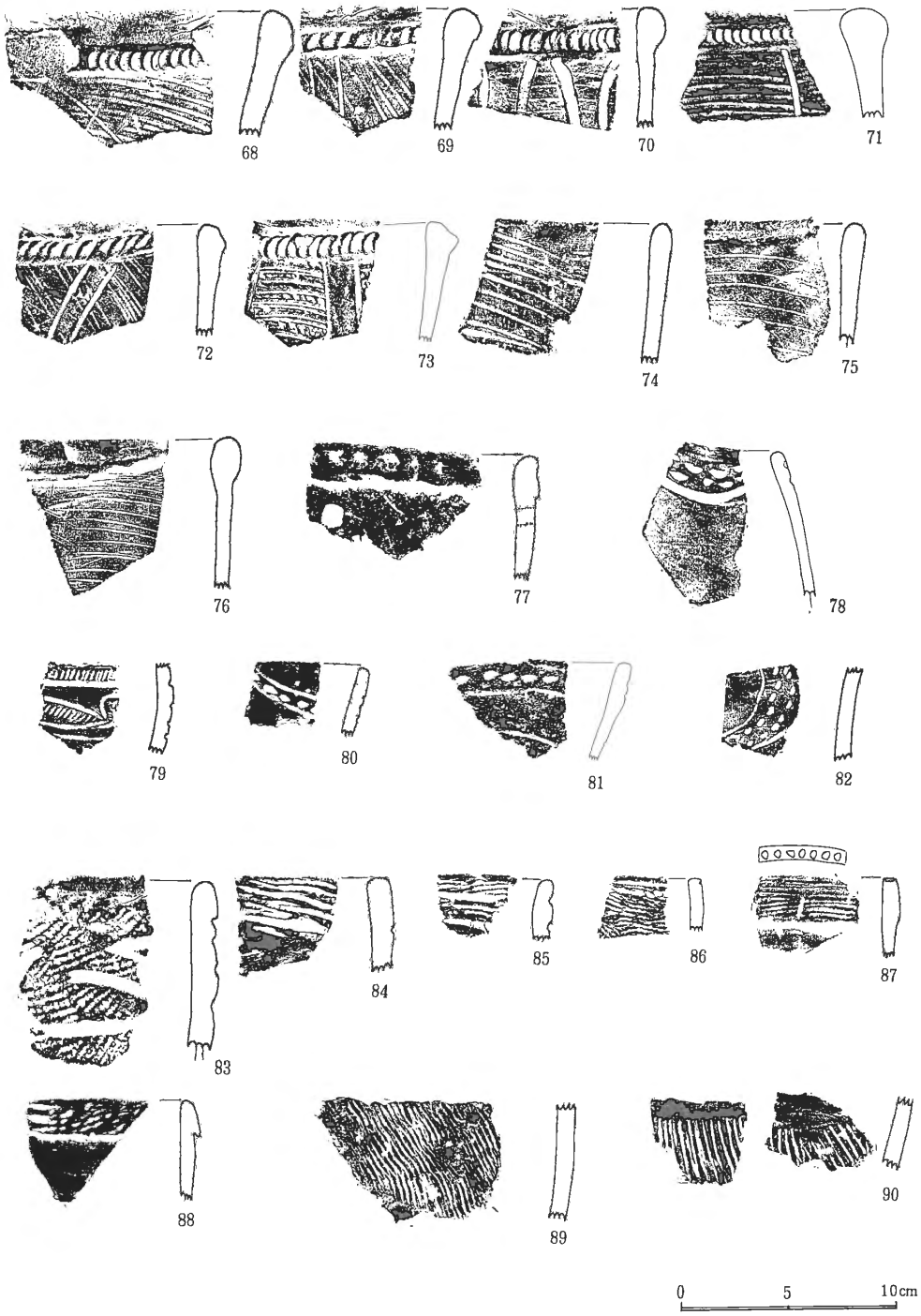
採集資料中唯一の完形土器である。器高は6.5㎝で胴部が鋭く張り、底部及び注口部を欠損している。口縁部には細いヘラ先状工具により不規則な浅い沈線が5条施される。胴部上段は横走の縄文（ＲＬ）を施文後極めて細い沈線により５単位の楕円文を配し、文様の区切り部に１～３個の瘤が５単位みられ、文様割付けの失敗によるものか楕円文の一部は注口部の裾にかかる。胴部中央に磨消縄文帯を設けており、胴部下半には細かい斜方向のヘラ削りが施されている。色調は黄褐色を呈し、胎土中に砂粒を多く含むも焼成は良好である。本土器は文様の割り付け及び文様の描出技法は稚拙であるが、５単位の瘤及びそろばん玉状に胴部が張る器形からみて、加曽利ＢⅢ式あるいは曽谷式に伴なう土器と思われる。

10　土器底部（第７図６～８）

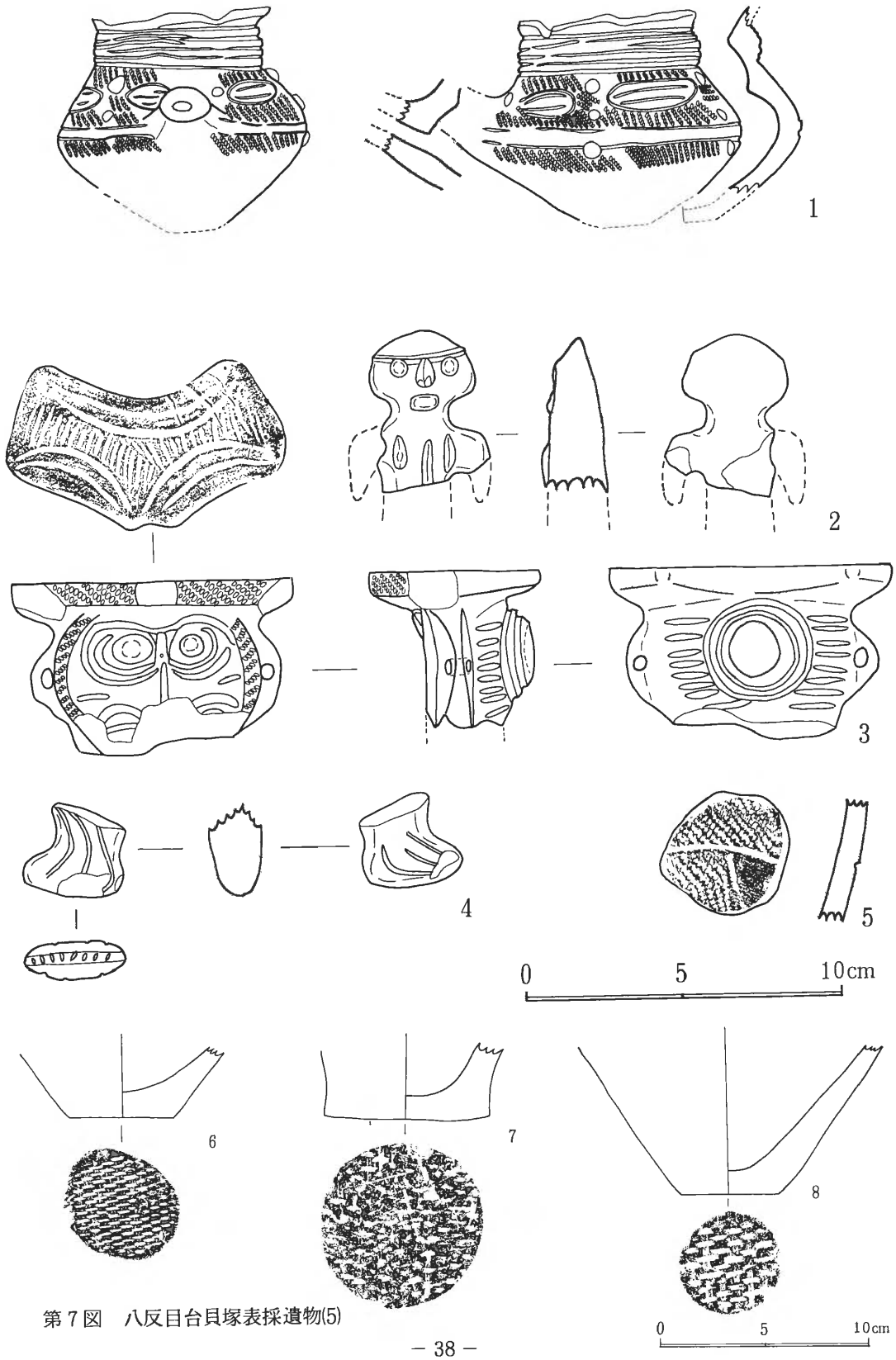
網代を有する底部で、経の条に対して緯の条が「２本越え、１本潜り、１本送り」に編まれている。底部の形態より７は加曽利Ｂ式、６・８は安行Ⅰないし安行Ⅱ式土器であろう。

Ｂ　土　製　品

１　山形土偶（第７図２）　胴部上半のみで、残存高5.2㎝、幅4.6㎝（推定）・厚さ2.2㎝で胴部下半及び両手を欠いている。頭部はゆるやかな山形を呈し、顔面の眉毛を微隆帯で、中



第６図　八反目台貝塚採集遺物(4)



第７図　八反目台貝塚表採遺物(5)

央の目と口を小豆状の貼り付けで、鼻を小突起及び２つの浅い刺突で表現している。胴部中央に縦の微隆帯を施し両側には乳房を表わす縦長の突起を配しており、山形土偶によくみられる頭部裏面の瘤は無い。加曽利Ｂ式期に伴なうもので、茨城県広畑貝塚出土の山形土偶に類例が求められる（文献８）。

２　木菟土偶（第７図３）　頭部のみで、残存高5.5㎝・幅8.8㎝・厚さ3.2㎝を測る。縦位の縄文（ＲＬ）帯で円形に縁取られた顔面内に、渦巻状の沈線によって目が、中央部の縦長の小突起及び沈線によって鼻が表現されており、口の部分は欠損しているが両側に入墨を思わせる沈線がみられる。両脇の耳は小孔で簡単に表わされており、後頭部は円く膨らみ、円と直線の沈線で結髪を表現している。頭頂部には前面を横走の縄文（ＲＬ）を施文し、上面に沈線による文様を構成した平らな庇を乗せている。本土偶は顔面表現が比較的整っており、顔の輪郭を縄文帯で囲んでいる点や耳を小孔で簡単に表現している点など千葉県余山貝塚出土の土偶に顔面表現の描出方法が類似しており、木菟土偶でも比較的古い安行Ｉ式期に伴なうものと思われる（文献９）。Ａ地点の西側より高沼隆氏が採集したものである。

３　土偶脚部（第７図４）　残存高3.0㎝・幅3.2㎝・厚さ1.7㎝を測り、３本の細い沈線が両面に施され、先端部には細かい刺突がなされている。

この他に曽谷式ないし安行Ｉ式土器の胴部破片を再利用した円盤状土製品（第７図５）及び加曽利Ｂ式の粗製土器の胴部破片を再利用した土錘が採集されている。

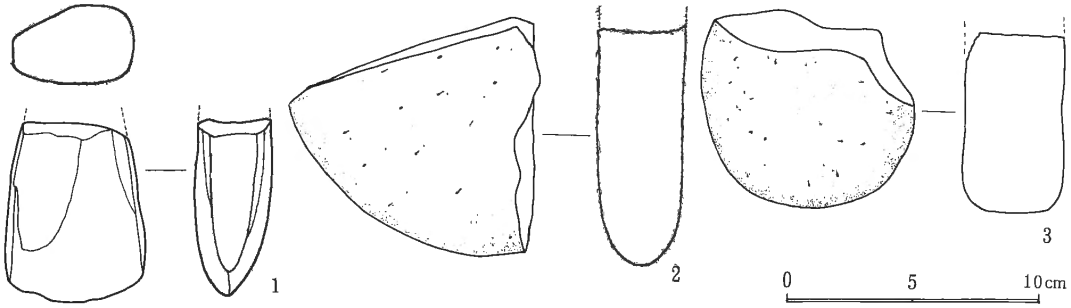
Ｃ　石　　器

１　磨製石斧（第８図１）　定角式磨製石斧で胴部中央より破損している。現存長7.2㎝・幅5.5㎝・厚さ3.1㎝で、全長は10㎝前後であったと思われる。

２　石皿（第８図２）　安山岩製で半径10㎝の円形の約$^{1}/_{4}$。厚さ3.5㎝で全面良く磨かれて滑らかである。

３　凹石（第８図３）現存長8.9㎝・幅10.8㎝・厚さ5.1㎝で両面に窪みを有する。

以上の他に分胴形石斧１点、凹石３点、アメリカ石鏃が１点採集されている。



第８図　八反目台貝塚採集遺物(6)

Ⅳ　おわりに

以上のように八反目台貝塚は加曽利Ｂ式～安行Ⅱ式土器を主体とする鹿島川流域でも大型の遺跡である。周辺の遺跡との関係をみると、野呂山田貝塚及び宮ノ台遺跡といくつかの共通点がみられる。野呂山田貝塚は加曽利Ｂ式～安行Ⅰ式土器を主体として加曽利Ｅ式～安行Ⅲｂ式土器が出土しており、４～５ケ所の地点貝塚が認められる。昭和31年に調査された加曽利Ｂ式期の貝層はハマグリを主体として、キサゴ、カガミガイ、アカニシ等の鹹水産貝種によって構成されている。また、西の谷を挟んで都川の支谷に立地する宮ノ台遺跡では、堀之内Ⅰ式期の住居址内に投棄された加曽利Ｂ式期の地点貝層が検出されており、ハマグリを主体としてシオフキ、アサリ、アカニシ等により貝層が構成されている。川戸彰氏は野呂山田貝塚の貝層が鹹水産貝種によって構成されているのに対して鹿島川下流の貝塚が淡水産のヤマトシジを主体に構成されている事を比較して、本地域の貝の採捨地を都川下流に求めている。八反目台貝塚はこの２遺跡とほぼ時期を同じくして集落が営まれており、同じ貝種により貝層が構成されている点より、これ等３遺跡が密接な関係を有していることは容易に窺える。本地域では中流の荒立貝塚を含めても貝層を形成するのは加曽利Ｂ式期で、ともにハマグリを主体とする鹹水産の貝塚である（文献10）。

芳賀輪遺跡、僧御堂遺跡等の中期の集落が後期中葉の加曽利Ｂ式期までで集落を終えているのに対して、前記の後期の遺跡は後期前半の堀之内Ⅰ式期より集落を営み始めている。このような集落の継続期間の問題は今後更に詳細な分布調査による確実な資料によらなければならないが、本地域にあっては後期前半の堀之内Ⅰ式期に遺跡の交代が始まり、それが加曽利Ｂ式期において、明確なものとして現れることが指摘される。

なお、今回紹介した注口土器、木菟土偶等の資料は加曽利貝塚博物館に寄贈され、展示公開されることになった。末筆ながら資料を提供して下さった高沼隆・和枝夫妻及び、飯塚博和氏に心から感謝申し上げたい。

（千葉市教育委員会文化課）

引用・参考文献

1. 千葉県教育委員会　『千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告書』　1983
2. 千葉市教育委員会　『千葉市芳賀輪遺跡－第１次発掘調査概報』　1976
   〃　『千葉市芳賀輪遺跡－第３次発掘調査概報』　1977
   〃　『千葉市芳賀輪遺跡－第２・７次発掘調査概報』　1984
3. 斉木　勝　『千葉市中野僧御堂遺跡』　1976　千葉県文化財センター
4. 川戸　彰　「野呂山田貝塚」『印旛・手賀沼周辺埋蔵文化財調査（本編）』　1961　千葉県教育委員会
   米田耕之助　「千葉県野呂奥新田出土の土偶・土版」『立正考古』第26号　1968
5. 金子裕之　「茨城県広畑貝塚出土の後・晩期縄文式土器」考古学雑誌第65巻１号　1979
6. 清藤一順　『千葉市矢作貝塚』　1981　千葉県文化財センター
7. 西村正衛　「千葉県成田市荒海貝塚Ｃ地点発掘報告」『学術研究』第14号　1965
   西山太郎　「縄文時代晩期に出現した撚糸文土器について」『史館』第15号　1983
8. 池上啓介　「廣畑貝塚」『史前学雑誌』第５巻５号　1933
9. 江坂輝弥　『土偶』　1960
   江坂輝弥他　「土偶芸術と信仰」『古代史発掘３』　1974
   市立市川博物館　「千葉県の土偶」　1980
   鷹野光行　「安行の土偶覚書」『歴史公論』第94号　1983
10. 堀越正行　「谷奥貝塚の意味するもの」『史館』第15号　1983